



大阪経済大学 総合型選抜対策講座(小論文)

夕陽丘予備校 小論文講師
橋本 眞澄

I 推薦小論文の形式・内容

2022 年度の問題についていえば、以下のそれぞれにおいて、

1. すべて 2 問構成。90 分で 2 教科。
2. 第 1 問は、課題文要約 (300 字)。第 2 問は、意見陳述 (500~600 字)
3. 課題文の字数は、おおむね以下のとおり。その出典 (著者、書籍名) も示すので、内容を看取してほしい。
4. 第 2 問の意見陳述問題も示してみよう。

指 定 校 推 薦

養老孟司 『バカの壁』

54 字×45 行=2400 字程度

筆者のいう「個性」について、「あなたの思うところを述べなさい」(500 字以内)

商工系資格評価型選抜

大野晋 『日本語と私』

46 字×24 行=1100 字程度

日本人は欧米人に比べ、自身の主張する意見を支える事実を突き詰める態度に乏しいという筆者の主張について、「あなたの考えを述べなさい」(500 字以内)

スポーツ評価型選抜

「共生社会考える契機にしよう」 『読売新聞』

47 字×27 行=1200 字程度

「スポーツ競技者として」、「共生社会の実現」にどのような貢献ができるか、「具体的事例を挙げながら述べなさい」(600 字以内)

II 対策

第 1 問 課題文要約について

受講生に認識してもらいたい事柄を伝えよう。

鉄則 1 「要約とは、課題文のコンパクト版を作るのではない。」

→ 筆者の提示する諸論点、それらの論理的関係、価値的なヒエラルキーなどを、あなたの価値基準に照らし評価した上で、あなたの理解を通して、整理する。

鉄則 2 「あなたは無色透明ではない。」

→ 課題文を要約すべく、あるフレーズあるいはキーワードをピックアップした瞬間に、それはあなたが、それらが他のフレーズやキーワードよりも重要であると判断したことを表現する。つまり、要約も一つの価値判断である。

鉄則 3 「筆者の意見は、あなたの意見ではない。」

→ 「筆者は、…のように主張する」という形をつねに意識して。

鉄則 4 「キーワードは抜く。ただし、キーセンテンスは抜かない。」

→ あなたが課題文をどう理解したのか、そして、理解した内容を表現するには、筆者の文章からキラリと光るキーワード(ズ)を的確に抜き出し、それを自分の言葉を交えながら文章に組み立てる。

キーワードを抜き出すことで本文に即し、他方、キーセンテンスを抜かないことで、本文に密着しすぎない、あなたの理解した内容を表現することができるはずだ(たぶん)。

今回、取り上げるのは、

2022 年度 大阪経済大学 商工系資格評価型選抜、大野晋 『日本語と私』 朝日出版社 1999 年だ。

大野晋 [1919—2008]

東京帝国大学文学部で、橋本進吉に師事。上代特殊仮名遣いの研究を進める。本居宣長の研究、日本語の起源や変遷についての考察、など。

著書

『日本語の文法を考える』、『日本語練習帳』、『日本語の教室』、『日本語の起源』、『日本語とタミル語』、『岩波古語辞典』の編纂、など。

ほとんどの学生が作成する要約文は、つぎのようなものだろう。再現してみた。

学生例

敗戦直後、CIE（GHQ 民間情報教育局）の発想に基づき、日本人のローマ字主義者、カナモジ論者が中心となって、「日本人の読み書き能力」の調査が行われた結果、日本人の識字率が当時の世界としては傑出していることが分かった。

南インドのタミル語と日本語が密接な関係にあることが分かって以来、ヨーロッパ人の研究に触れたが、そこで感じたことは、彼らは日本の言語学者、国語学者よりも「事実に対して誠意がある」ということだ。

日本人は事実をつきつめず、事実よりもそれをめぐる人間関係に配慮する、あるいは事実をあえてぼやかして扱おうとする傾向すらある。欧米では自らの発言を支える事実を客観的に明らかにするという基本的態度がある。
(299 字)

その特徴は、

1. 各形式段落から、重要と思われる文やフレーズを抜き出し、課題文の順序に沿って、並べている。
2. 抜き出したフレーズが、課題文全体の中でどのような意味をもつのか、各フレーズは重要度においてどのように違いがあるのか、などには無関心に、ただ並べている。
3. 筆者の価値判断を述べるフレーズも、地の文に混在しているから、それは、この答案を書いている受験生の判断だと読めてしまう。

評価

全否定はしないけれど、あまり完成度の高い答案ではない。

答案の第 3 段落は悪くないものの、第 1 段落は論点がズレている。ここでの論点は、後段に述べる、「科学的な姿勢の相違」、つまり「事実」に対する態度の、日本人と欧米人との違いを示す例であるから、日本人の識字率の高さや、調査の主体などは、直接には主要な論点とはいえないよね。

要約例

筆者は、以下の事例から日本人が「事実」を厳密に扱わないと主張する。

まず、敗戦直後、難解な日本語の平易化を目論む日本のローマ字主義者と CIE（GHQ 民間情報教育局）による、日本人の識字率調査。そのスコアの世界水準における傑出から改革を不要とした CIE と、それとの比較なしにスコアを「低い」と断じ平易化を進めた日本勢の違い。

ついで、筆者がヨーロッパの学者との比較で感じた彼我の「事実に対する誠意」、「事実に基づく判断」の違い。

これらは、日本人は事実をつきつめない、事実をあえてぼやかすという傾向、つまり欧米に一般的な自らの主張を支える事実を客観的に明示するという基本的態度が日本人に乏しいことを示すと指摘する。(297 字)

どうだろう？ 論述展開は、課題文とは異なるよね。ここでは、筆者の主張（5 段落にみえる）を端的に冒頭に置いてみた。課題文の第 1 から第 4 段落までは、最終の 5 段落で述べたい主張を補強する事例（具体例）であるから、このような段落構成の方が、読み手に分かりやすいと判断した。いわゆる頭括型の論述。

参考にしてみてください。

ちなみに、国字改革（国字改良運動）は、戦後の日本で、ある程度、実現した運動。

1946 年	当用漢字表	1850 字
1948 年	当用漢字音訓表	
1949 年	当用漢字字体表	音訓と字体を定める
1948 年	当用漢字別表	1850 のうち 881 字が教育漢字とされる
1951 年	人名用漢字別表	当用漢字以外の 92 字が追加
1981 年	常用漢字表	1945 字を定める。これまでの諸表は廃止
同 年	新人名用漢字表常用漢字	
2010 年	常用漢字表	1981 年のものを見なおし。2136 字

第2問 意見陳述について

鉄則1 「当たり前の文章（正しい日本語）を書くこと。」

- 誤字、脱字
- てにをは（助詞の使い方）
- 接続語の使い方
- 原稿用紙の使い方
- 行頭禁則
- 論理的に破綻のない文
- 口語表現を使わないこと

鉄則2 「小論文を書くこと。」

- あなたの思いを――主観的に――訴えるのではなく、あなたの考えを――客観的に――論理によって読み手に伝え、納得させるように。

鉄則3 「あなたの独自の論点を盛りこむべし。」

- 他の受験生の答案に埋もれないように、特徴ある主張を、可能ならば、一点で良いから、展開しよう。たとえば、逆説を含むような主張。

【逆説】 一見、真理にそむいているようにみえて、実は一面の真理を言い表している表現。「急がば回れ」など。パラドックス。（『大辞泉』）

鉄則4 「練習のとき以上の成果は、本番では出せない。」

- ふだん、文章を書くときに、現在の自分としてはこれ以上の良い文は書けないと思えるほどに、推敲を重ね、作文すること。その積み重ねが、おそらくそのみが、あなたの作文力を上達させる。

鉄則5 「書く私と、書く私を判断する私を分離すること。」

- 間違った文を書こうとする人は、いない。にもかかわらず、間違ってしまう。それは、「書く私」の視点で、書かれた文を読むから。書かれた文を、書く私とは違う、「判断する私」の眼で読み直すことができるように。言い方を変えると、書かれた文を、対象 object として認識すること。これが、客観的 objective に読み直すということ。

意見陳述例

欧米人と日本人の事実に対する態度の違いは、まず、日本人はあらゆる分野において「事実」をつきつめない、対立があれば人間関係の方を重視する、ついで、そうした環境ゆえ自己主張はそれだけで評価されうるが、欧米ではその主張の根拠となる「事実」の明示が要求される点だと筆者は言う。

この指摘はおおむね正しいと思う。その根拠はヨーロッパの側からの、すなわちユダヤ人ゆえにドイツから日本に亡命し 1936 年から 5 年間留まった哲学者 K.レーヴィットの指摘にある。

彼によると、日本人はその知性を駆使してヨーロッパの各学問を研究し、その知識を急速に摂取した。だが、摂取したのは「物質文明」にすぎず、彼らの「精神」は受容しなかった。ヨーロッパ人は、その「精神」ゆえに自己自身を客観化し、「事実」に基づいて自らを批判する。ところが、こうした精神を受肉化しない日本人は自らを醒めた眼で客観視できず、ゆえに自らに不都合な「事実」を不問に付す。つまり、自己否定の要素を介して、かえって自己を発展促進する契機を自ら放棄している、と。

レーヴィットと大野の指摘は、日本人が「事実」を基に「判断を下す強靱さ」に欠けることをともに示すと考える。(495 字)

K.レーヴィット[1897-1973]

ドイツの哲学者。マールブルク大学にて M.ハイデガーに師事。彼のナチへの接近後は批判者となる。ドイツから日本（東北大学）に亡命し、その後、米国へ。戦後は西ドイツに帰国してハイデルベルク大学教授となる。著書は、『キルケゴールとニーチェ』、『ウェーバーとマルクス』、『ヨーロッパのニヒリズム』、『ヘーゲルからニーチェへ』、『乏しき時代の思索者』、『ナチズムと私の生活』、『ある反時代的考察』など。

上に引用したものは、彼が日本で執筆した『ヨーロッパのニヒリズム』にみえる。

そこで彼は、ヨーロッパ人の「自己批判」と、日本人の「自己愛」を対比する。日本人は、ヨーロッパの物質文明は受容したが、彼らの精神は受け入れなかったと指摘し、自己をくぐり抜けることのない受容形態が、一方であれほどの急速な摂取を可能にし、他方、日本人の精神にはなんらの影響も与えなかった。それゆえに、日本人の精神構造は、固有の特徴を持つ。彼は有名な譬喩でそれを表現した。

つまり、日本人の精神構造は、喩えて言えば、聖徳太子、孔子、空海、長明、宣長らの、日本的に感じたり考えたりする下の階と、プラトンやマルクス、カント、ハイデガーらのヨーロッパの学問が並べられる上の階という、二階建ての家屋である、しかし、この建物の[]はどこにあるのか、と日本人の精神構造の問題点を剔抉した。